

奄美語（大島南部方言）の社会言語学的状況とその言語的特徴

前田達朗（東京外国語大学）¹

讃井綾香（大阪大学）²

0. はじめに

ここで奄美語の大島南部方言とするのは、SILのAmami-Oshima, Southernとされているものと理解している。奄美大島はその人口分布や旧来の共同体から考えると、旧名瀬市、笠利町、龍郷町で構成される北部と、大和村、宇検村、旧住用町で構成される中部、そして瀬戸内町の南部と分けられるだろう。現在でこそ道路の整備でこれらの地域の行き来は簡単になっているが、山がちで海岸線も複雑な地形は、かつては同じ島の中とはいえ海路以外での往来を妨げていたことは間違いない。

ユネスコの危機言語地図ではAmamiと言語にされた奄美語であるが、人口が集中する北部についての研究とその成果は比較的豊富である一方で、中南部についてはまとまった研究成果は数が少ない。宇検村湯湾方言についての新永(2014)³、瀬戸内の諸方言についての真田ほか(2006)⁴などの研究をあげておく。

今回の調査では当初「加計呂麻島」が調査地点として指示されていたが、今回の調査では改めて「大島南部」とした。その理由を含めて瀬戸内町をその調査範囲とした理由を述べることから奄美語大島南部方言について述べる手がかりとする。また同じ「琉球（諸）語圏」とされることはあっても、沖縄県域と大きく違う奄美のことばをめぐる状況についても特に述べておく必要があると考えている。

本報告の目的は、①奄美語をめぐる社会言語学的状況の概括と②調査において見られた大島南部方言の特徴の指摘、である。

1 奄美語の社会言語学的状況

1-1 本調査の調査範囲瀬戸内町と大島内部での位置づけ

「はじめに」で述べたように、奄美大島内部は北部、南部、中部と分けられるのであるが、中部とした二つの村のうち、大和村は名瀬との結びつきが強く、宇検村を南とした、南北二つに分けられることもある。しかしどちらもなんらかの行政的な根拠があるわけではなく、首都とも呼べる名瀬から見たときには、瀬戸内町の中心地である古仁屋近辺を象徴として「南」とする感覚も存在する。名瀬から古仁屋までの距離はおよそ50キロとされているが、トンネルが整備されるにつれ所要時間は短くなり、この10年でおおよそ20分短縮されて、自動車でも1時間未満の移動である。しかしいわゆる「ストロー現象」がおこり、古仁屋の機能は縮小され、名瀬への一極集中が起きている。

瀬戸内町は「復帰」直後の1955年のいわゆる「昭和の大合併」で現在の行政区域となる。町村制の導入は1908年を待たなければならなかったが、古仁屋町、西方村、実久（さねく）村、鎮西村が

¹ 東京外国語大学 国際日本研究院准教授

² 大阪大学大学院 言語文化研究科博士課程

³ 新永悠人 2014 「北琉球奄美大島湯湾方言の動詞形態論」

⁴ 真田信治ほか 2006 『薩南諸島におけるネオ方言（中間方言）の実態調査』

合併前最後の行政区であるが、東方村が 1936 年に古仁屋町になったため、古仁屋以外の旧東方村を指して今でも東方と呼ぶことがある。合併前の旧村が今でも強く意識されている。この地域的なつながりに説明を割くのは、この旧村が行き来の日常的にある範囲であるからだ。合併以前を知る高齢者だけでなくその下の世代にも引き継がれている。240 km²の面積（大阪市域とほぼ同じ）におよそ 9000 人程度の人口で、そのうちの 7000 人ほどが古仁屋とその周辺に集中するという偏りは、より地域性を意識させることと、古仁屋にいかにつながるかを考えることにつながっている。旧村のうち古仁屋、西方が奄美大島に位置するが、西方のうちでも古仁屋に近い集落がなんとか人口と本来持っていた機能を保っている。加計呂麻のうちでも古仁屋と渡船で 15 分の距離にあるのは鎮西村側であり、教育・医療・流通などを大島側に依存しながらもなんとか集落を維持している。加計呂麻島のうち移動を制限する山地を挟んで大島と反対側と、請島、与路島が旧の実久村であり、より過疎化がすすんでいる。加計呂麻の南側、つまり旧実久村側には定期船は通わず日に数本のバスだけが自動車を運転しない高齢者の移動手段である。

こうした地形による往来の制限と近代以降の行政区の変化が、いまま集落同士の切り・結びに関わっている。そしてそのことと言語のバラエティは人々の意識の中で結びついている。「シマごとの違い」が強調されるのはこうした背景がある。「どこのシマの出身かはアクセントでわかる」という言説はいまだ生き続けている。⁵

こうした社会言語学的背景から、島としての加計呂麻を取り出す意義はないと判断し、大島最南部と加計呂麻、請、与路にまたがる現瀬戸内町域を「奄美大島南部」としたのはこういった理由がある。かつての間切をもとにした集落共同体とその集まりは、薩摩時代も支配のために利用され、後述するが近代化以降も続いた鹿児島による支配と施策が集落共同体とその生活、そして生活言語の維持に大きく関わったことは想像できる。

1-2 奄美と奄美語の歴史的背景

この節では他の琉球(諸)語地域、すなわち沖縄県域との差異を中心に述べていく。言語的な近似性はいうまでもない。しかし近世以降の奄美と沖縄の歴史はもちろん重なり合いながらも異なり、それは今に続いている。言うまでもなく、薩摩・鹿児島島の支配が 17 世紀以来続いていることがそれらの異同と深く関わっている。

1609 年の琉球への薩摩の軍事侵攻の結果、与論以北の奄美群島は薩摩藩の直轄植民地となる。琉球王国時代の沖縄の農民に対する「二重支配」も苛烈であったが、薩摩藩直接のサトウキビのモノカルチャー、「換糖上納制」もそれに勝るとも劣らぬ残忍さをもって人々に記憶されている。ノルマの過酷さと耕地面積の制限から島民の食料生産は最低限に抑制され、天候不良などで簡単に飢饉に陥った。「ソテツ地獄」として語られる貧しさと飢えの記憶は、薩摩支配とほぼ同意で、いままなお語られる。

また「ヤンチュ（家人）」と呼ばれ、幕末期には総人口の 20~30%に達したと言われる債務奴隷の存在も、奄美の植民地期の過酷さの象徴の一つであろう。明治維新に薩摩が軍事集団として大きな役割を果たせた原資は、植民地奄美の黒糖であったといえる。差別的な施策がとられ今に至る奄美人への

⁵ 地域には「シマグチ名人」と呼ばれる人がなんにんかおり、出身集落がわかるということになっているが、多くの場合人間関係が濃密であり特に都市化した古仁屋ではどこの集落出身かということが、日常的にとりざたされており、ことばだけが手がかりかどうかは不明である。

まなざしがこの頃に形成されたことも間違いない。

明治期になっても鹿児島が奄美の黒糖の独占は続き、国庫補助金を「県本土」に集中させるための「独立採算制」がひかれた。サトウキビ栽培と製糖に極端に偏った産業構造が1920年代初頭の「糖価暴落」の打撃をうける。そもそもが経済規模や生産から余剰人口・余剰労働力がある中での窮地であった。そして当時まさに朝鮮半島と沖縄から最大の工業生産高を誇り安価な労働力を大量に必要としていた阪神工業地帯への航路が開かれ、奄美もその航路上にあった。

この「移民」が奄美語の言語状況に大きな影響を与えることになる過程は、沖縄のそれと酷似している。「本土」「内地」あるいは「外地」への移動を経験することで、自分たちが「日本」の枠組みの中でどのような位置にあり、自分たちのことばがどれほど「日本語」とされるものから距離があるのかに気づく。

そして差別的な扱いを受ける原因の多くを自分たちの母語に求めることになる。

さらに方言排斥の象徴的な出来事である教育現場での「方言矯正」は奄美でも見られた。方言札の記憶は共通していると言えよう。しかし、奄美の場合は鹿児島の教育行政の支配を受けていたという点で沖縄とは異なる。鹿児島でも、鹿児島方言は戦中戦後を通じて強制すべき対象だと考えられてきた。特に戦中の「標準語励行」期には組織的な方言矯正をすすめた。その力が奄美にも及んだと考えられるだろう。日本の敗戦後、琉球列島全域が米軍統治下に置かれたが、早くから沖縄との分離復帰が唱えられていた。その際に自分たちの「日本人性」を主張する手段は、自分たちは沖縄ではないと主張することであり、そのためにも奄美語は捨て去るべきものであった。「本土復帰運動」の時期もまた方言排斥のひとつのピークであった。

移民と学校現場での方言矯正という経験では沖縄と奄美は現象面では共通しているように見えるが、薩摩・鹿児島との関係に規定されていくという背景を持つ点で現在に至るまで大きく異なるのである。

1-3 言語状況と伝承活動

1974年の「奄美大島総合社会教育研究大会」で初めて「方言の尊重」が議題になった。これは全国的な趨勢でもあった。教師によっては「努力目標」として方言をできるだけ使わないという形で生き残りをはかった。が、70年代半ばには特別の場合をのぞき子どもたちに奄美語の能力が無くなり、矯正する必要がなくなったとも言えよう。このことから「ネイティブ世代」といえるのは現在の60代以上と推測される。琉球列島全域に共通する現象であろう。そして尊重されるべき「シマグチ」の継承は途絶していた。さらに「方言は役に立たないもの」という言語意識は教育の成果として徹底されており、後述する子ども向けの「シマグチ」教室を開催する際に反対したのは子どもたちの親だった。使うなといわれ、罰まで与えられた経験を持つ中年以上の世代にとっては受け入れられないものであった。

瀬戸内町についていえば10年近くたった80年代半ば、公民館で教室が開かれるまで、「シマグチ」が教えられるということはなかった。これらのことを考えると尊重されているというよりも、ようやくシマグチが消えていく可能性があるということが認識されたということだと言える。

古仁屋にある中央公民館を中心に大島、加計呂間島、請島、与路島の41の集落に分館があった。公民館は「文化の中心」とされ、存在意義は住民の中で大きく、郵便局、学校とともに公民館があることで「一人前の集落」と考えられている。2000年代半ばまで子ども向けの「シマグチ教室」は18の公民館で行われていた。しかし「受け手」である子どもの数の減少、社会教育予算の削減などが契機となって、すべての集落でかつて行われていた伝承活動は途絶えている。子ども向けのプログラ

ムに「シマウタ教室」があるが、この活動がいま奄美語の唯一のてがかりと言えよう。教え手が高齢者、受け手が子どもという構図からも抜け出せずにいるが、たとえば集落の行事でネイティブ世代の下の中年層にシマグチの能力がないために、開催や進行に支障が出ている事例が散見される。

こういった伝承活動が停滞する中「子ども島口大会」は、1994年に第一回大会が開かれ現在も続いている。子どもだけを対象としたシマグチの催しとしては奄美で唯一のものであったが、「島口」だけでの大会の維持は難しく、名瀬での「弁論大会」が「芸能大会」へと形を変えたのと同様に2006年度から「子ども島口・伝統芸能大会」へと名称を変えた。学校ごとの代表が出場することになっているが、全ての学校が代表を送っているわけではない。シマグチを指導できる教員が学校にはいないために、前述のように教え手を地域の老人に頼らざるを得ないと言う事情があるためだ。当初は学校で教えようと試みられたらしいが、地域への依存度が高くなっている。そして「大会のための練習」に現在ではとどまっており、継続的、組織的な伝承活動が望めない状況が続いている。

2. 調査項目について

今回の調査では共通の調査項目を求められたため、それに従い下記の要領で調査を行った。

調査期間 2016年1月21~27日

調査地点 鹿児島県大島郡瀬戸内町 古仁屋、篠川、俵、瀬相集落

調査協力者の概要

- A I.K氏男性 1930年大連生まれ。1945~1953 俵、古仁屋。1953~1988 大阪。
1988~俵
- B U.S氏男性 1929年俵生まれ。内地に20年程度の居住歴あり（詳細不明）
- C H.S氏 1938年 篠川生まれ。移住歴なし。

2-1 調査項目と記録

調査項目については、かりまた・しげひさによる「名護市幸喜方言の名詞の格＝とりたての形」の調査票に倣った。25については「茶毘にする」ことが奄美でも火葬の習慣が長くなかったため、「吊いをする」に変えた。日本語文をカードに書き、その場で発話してもらうという方式をとった。以下その記録である。

1. 東の空が鳴ると、大風が吹く
 - (A) $\text{çiJanuu soraga naruba tep nuu } \phi\text{ucuruu}$
 - (B) $\text{koteino soraga narjuunteicijn:a o:kazega } \phi\text{ucuddo}$
 - (C) $\text{çiJanuu nabbaja tepdo}$

2. シュロの皮をはいで、「もっこ」を作る
 - (A) $\text{euuro no kurwo hadzi mokko ticirjuu}$
 - (B) $\text{euuro no kawa hadzi mokko tikurjuu}$
 - (C) $\text{tikuno ko: hadzi mokko ticirjuu}$

3. 暑いから、氷がほしい
 - (A) $\text{itea:saŋkara ko:ri } \phi\text{uea}$

- (B) itea:saŋkara ko:riga nuŋŋuɕa
 (C) itea:san ko:riga φuɕaja:
4. おまえの着物が引き裂けて、破れている
 (A) ura cinnu çicisakareturu
 (B) ura cin çiksəhə:te jabuuretuuddo
 (C) ura:cina çicisake:te jabuuretusuka
5. 段取りをするので、四五日貸しておいてくれ
 (A) dandori eunkara eigonitei karateikuuriri
 (B) tikubari eunkara eigonitei karateitikuuriri
 (C) tikubari eunnati(eunkara/eiccuunkaraN) eigonitei karateukuuri
6. 去年妹は、中学の先生になった
 (A) kuudu unarja teu:gakko:no sense:ni nata(do)
 (B) kuudu imo:toja teu:gakko:no sense:ni natado
 (C) kuudu imo:toja gakkono sense:ni natta
7. 校長先生が、バスから降りてきた
 (A) ko:teo:sense:ga basuhara uritittea
 (B) ko:teo:sense:ga basuhara oritecitea
 (C) koteonse:ga basukara uritittea
8. 花子の顔は、おばあさんによく似ている
 (A) hanakono kaoja amman dziciteiba niteuru
 (B) hanakono kaoja ammani jokku niteuuddo
 (C) hanakono kaoja oba:sanni dzi:fi niteuru(ja)
9. 車が飛び出してきた
 (A) kuruumanu tubidaicitte
 (B) kuruumanu tobidadzittean
 (C) kuruumaga tadaidziteitea
10. かず子の布団が、屋根の上に、干してある
 (A) kazuukono φutuŋga janenu uenan φuteinan
 (B) kazuukono φuton janenu uman φuteijaddo
 (C) kazuuko: φutonŋga janenu uman φuisatteoru
11. 太郎はじいさんにしかられた
 (A) taro:ja dzuun tatarata

- (B) taro:ja dzu:ni jattuuttado
 (C) taro:ja dzi:sanno i:kusatta
12. 鼻にごはん粒がついている
 (A) hananan mecitebunuu çitçuuru
 (B) hananan meçitsubuno tsusjuussa
 (C) hananan meçitsubuno tsujoruu
13. 花子は、顔がおばあさんに似ている
 (A) hanakoja kaoga ?amman niteuruu (niteuddo)
 (B) hanakoja tirano ba:teanni(ammami) niteuddo
 (C) hanakoja kaoba oba:sanni niteu:ruu
14. 太郎は去年から東京にいる
 (A) taro:ja kuuduhara to:co:nan oruu
 (B) taro:ja kuudu:hara to:conan oddo
 (C) taro:ja kuuduhara to:co:nan oruu
15. 太郎は八月に帰ってくる
 (A) taro:ja hateigatin mudo:ticuruu
 (B) taro:ja hateigwatunpa modo:ticuddo
 (C) taro:ja hatigwatuniwa modotticijoruu
16. 役場に行ってくれ
 (A) jakubahatei idzikuriri
 (B) jakubahatei idzikuriri
 (C) jakubahatei idziteikuriri
17. それをおれに渡せ
 (A) uruba wanun watasi
 (B) urja wanumaha watasi(kanjarasi)
 (C) ũ wani jarasi
18. うちの玄関は東向きだ
 (A) wa:ca ja:nuu genkanna çigja muukido
 (B) ja:nuu genkwanna kotei muukido
 (C) ja:nuu genkwanna çigaei muukudo
19. 太郎はものさしで次郎をたたいた
 (A) taro:ja monosaei dziro:(ba) uttea

- (B) taro:ja monosaei d_ziro:ba utteaddo
 (C) taro:ja monosaei d_ziro:ba eu:dza(uttea)
20. 車で行くよりバスの方がいい
 (A) kuurumaei icum çimma basuno ho:ga i:do(itteaddo)
 (B) kuurumaei icummun ikka basudtu itteaddo
 (C) kuuruməka icikkwa: basude itean
21. 次郎は紙でこいのぼりを作った
 (A) d_ziro:wa kamiei koinoboriba tikita
 (B) d_ziro:ja kamiei koinoboriba tikita
 (C) d_ziro:ja kaŋei koinobori tikitam
22. 花子は昨日から病気で寝ている
 (A) hanakoja cijuhara bjokuwei nepturuu
 (B) hanako cijuu:hara bjokuwei neputundo
 (C) hanakoja cijuhara guuwaino waru:te nepturuu
23. 学校に早く行った
 (A) gakkohatei he:ki idza:
 (B) gwakohaei həkitei
 (C) gwakwohateuasai idza:
24. この上着は、東京で二千円で買った
 (A) kuun uwa:fija to:co:nanti nisēnei ko:ta
 (B) kuun uwa:fija to:co:nanti nisēnei ko:tado
 (C) kuun ŋuukuja to:co:nanti nisēnei ko:ta
25. 祖母が亡くなったから、今日弔いをする
 (A) ammaga umorangutunnatan cu: so:eici euddo (euuru)
 (B) ammaga mo:ricattahara cu: kujamieuddo
 (C) ammaga mo:ricankaran cu:nanti tomo:suramba
26. 花子がアメリカから今日来る
 (A) hanakoja amerikahara cu: cuuru
 (B) hanakoja amerikahara cu: cuddo
 (C) hanakoja amerikakara cu: cu:ru
27. わたしたちはわからないので、あのひとたちから習う
 (A) wacaja wakarankaran anteuncahara narō:

- (B) wa:caja wakan̄kara anteu^uncahara nare:
 (C) waca: wakan̄karan̄ anteu^uncahara cico:
28. 焼酎はサトウキビから作る
 (A) eo:teuja (seheja) stahara (staei) tikirjuu
 (B) sehəgwaja ugi hara(eiruu) ticirjuu
 (C) sehəja(eo:teuja) sta ei(hara) tikirjuu
29. 畑の中をイヌが歩いている
 (A) hate:no na:ba innuu atte^uuru
 (B) atehenu nahaba innuu atte^uuru
 (C) atehen nahaba innuu atte^uuru
30. 家の隙間から、風がはいる
 (A) ja:nuu suucimahara kazenu itte^uuru
 (B) jana:tei kazenu itte^uuuddo
 (C) ja:nuu e:dahara kazenu(kazega) itte^ui
31. 荷物を、バス停まで、かついで行け
 (A) nimotsuba basute:gadi katamiti ici
 (B) nimotuba basuteimade katamu^uti ici
 (C) nimotuba basute:gadi katamu^uti ici
32. 明日まで待っておれ
 (A) attea:gadi matte^uori
 (B) attea:gade matte^uore
 (C) attea:gadi matte^uore
33. ひろえばあさんまでは、入れ墨 (はぢち) を してあった
 (A) çiroeba:san̄gadija hadeciba ei:jattado
 (B)
 (C) çiroeba:san̄gadija hadiçi ç:i:jata
34. 花子はず子と、仲がよい
 (A) hanakoja kazuikottu nakaga itte^ua
 (B) hanakoja kazuikoto i:duu euuddo
 (C) hanakoto kazuikotja dzikka nakano itte^uaddo
35. 昨日友達とあそんだ
 (A) cijuu: duei asuda

- (B) cijnu: duceitu asudado
 (C) cijnu: duceito adda
36. 君らとは家が近所だな
 (A) ura:catuja ja:ga teicasan
 (B) uracatuja ja:ga teicasancinne
 (C) ura:toja jaga teicasareja
37. この魚は、天ぷらよりも刺身がうまい
 (A) kuN juu:ja tempura çim:a saeimidu ma:sa
 (B) kuN juu:ja tempura (e)ikka saeimidu ma:saddo
 (C) kuN tempura ikka saeimidu ma:saN
38. おまえはこの魚の名前を知っているか？
 (A) uraja kuN juu:nu na:ba eitteunja
 (B) uraja un juu:nu namaeba eitteunja
 (C) uraja kuN juunu na: eitteunja
39. 母さんも、風邪をひいている
 (A) ammagadi kaze(ba) çiteuru(u)çiteuddo
 (B) ammam kazeba hiteuddo
 (C) hokka teiba kaze: çiteuru
40. 八月踊りのときは、小さな子どもまで踊った
 (A) hateigatsuuudurinu tucca insan kwancagadi udu:ta
 (B) hateigatsuuudurinu tucinja inasan kwancagadi uduuru
 (C) hatigwatunnuun tucinja i:naŋgwancagadi uduuttuta
41. 豚の声が聞こえるが、豚がいるのだろうか？
 (A) wa:nu kui:nu cicattuska wa:ga ŋummuundaro:ka
 (B) wa:nu kuenu cicadusuga wa:nu urjukai
 (C) wa:nu kui:nu eu wa:nu uruŋkaja
42. むだに つかわない道具ばかり 集めてある
 (A) muudani tskon dogubəhər atimetean
 (B) numkuea dogubehe atumeteru
 (C) ammari tsukon dogu atumetearu
43. 次郎は、家屋敷まで売ってしまった
 (A) dziro:ja ja:jaeici gadi tutieimoti

- (B) ja:jaeici gadi utado
 (C) dziro:ja ja:jaeici gadi tutjaruba

2-2 音節構造

音節構造における特徴として、以下の(1)に示すように、子音のみでモーラを成すことがあげられる。

- (1) [ura cin çiksəhə:te jabuuretuddo]
 おまえの着物が引き裂けて、破れている。

2-3 子音

子音音素として/p, t, k, b, d, g, m, n, r, h, s, z, ç/が立てられる。実際に観察される音声との対応は以下のようなになる。

[p] (/p/)	[t] (/t/)	[ç] (/k/)	[k] (/k/)	
[b] (/b/)	[d] (/d/)	[ʒ] (/g/)	[g] (/g/)	
[m] (/m/)	[n] (/n/)	[ɲ] (/n/)	[ɲ] (/n/)	[ɳ] (/n/)
	[r] (/r/)			
[ɸ] (/h/)	[s] (/s/)	[ç] (/s/)	[ç] (/h/)	[h] (/h/)
	[z] (/z/)			
		[tç] (/c/)		
		[dç] (/z/)		

2-4 母音

中舌母音[i], [ə]を含む[i, i, e, ə, a, o, u]が観察される。しかし、中舌母音の表出頻度には以下の(2a), (2b)に示すように個人差がある。

- (2a) [seheja stahara tikiɾju]

焼酎は砂糖から作る。

- (2b) [sehəja stahara tikiɾju]

焼酎は砂糖から作る。

(2a), (2b)はそれぞれ別のインフォーマントから得られたものである。「焼酎は」に当たる部分を比べると、(2a)は[seheja]であるのに対し、(2b)は[sehəja]になっている。このように、今回得られたデータからは、中舌母音が意味の弁別に関わっているとは言い難い。母音音素として/i, e, ə, o, u/が立てられ、[i], [ə]はそれぞれ/i/, /e/の異音だと考えられる。

2-5 半母音

半母音音素として/j, w/が立てられる。共通日本語には見られない当該地域の言語の特徴として、以下の(3), (4)に示すように合拗音の存在があげられる。

(3) [ja:nuu genkwanna çiğaci mukudo]

うちの玄関は東向きだ。

(4) [gwakohaci həkɪtçi]

学校に早く行った。

合拗音も先述の中舌母音のように個人差があり、意味の弁別には関わっていないとみられる。/k/の異音として[kw]、/g/の異音として[gw]が観察される。

2-6 音声・音韻についてのまとめ

奄美語大島南部及び加計呂麻島方言には、子音のみによるモーラの形成、中舌母音、合拗音という現代共通日本語には見られない特徴が観察された。しかし、このような特徴の表出頻度には個人差があり、当該地域の言語の特徴は徐々に失われている可能性がある。

3 語彙について

それぞれの発話の中に日本語の混淆が一定程度みられる。歴史的背景の項でも述べたように早くから薩摩の支配をうけ、他の琉球語圏以上に日本語特に九州方言の影響を強く受けているといえよう。一例として親族呼称の混乱がみられる。

本来母親を現す *amma* が祖母をさすことがあるが、39(C)のような日本語の侵入によって起こった現象だと考えられる。

(参考文献)

上里隆史(2009) 『琉日戦争一六〇九—島津氏の琉球侵攻』 ボーダー・インク

先田光演(2013) 『奄美諸島の砂糖政策と倒幕資金』 南方新社

土岐 哲 (2009) 「第5章 現代語の音声学・音韻論」 工藤 浩・他『改訂版 日本語要説』 pp.117-157, ひつじ書房

前田達朗(2006) 「奄美大島瀬戸内町における『シマグチ』伝承活動」 『多言語社会研究会 年報4』 多言語社会研究会

前田達朗(2010) 「経験としての『移民』とそのことば」 『ことばと社会』12号特集移民と言語② 三元社

前田達朗(2013) 「鹿児島県の国語教育における標準語/方言イデオロギー」 『日本語・日本学研究』3号 東京外国語大学国際日本研究センター

Maeda,Tatsuro 2014 *Amamian Language Life ~Experience of Migration and "Dialect Correction"* MarkAnderson&PatrickHeinrich (eds.) *Language Crisis in Ryukyus* Cambridge Scholars Publishing, New Castle upon Tyle